第一生命ホール7周年記念コンサート

TAN's Amici Concert

日本音楽集団
PRO MUSICA NIPPONIA

PRO MUSICA NIPPONIA

第193回定期演奏会
The 193rd Regular Concert

和。声

邦楽器と合唱の交響

2008年11月15日[土]
午後2時開演
第一生命ホール

主催
特定非営利活動法人日本音楽集団
NPOトリトン・アーツ・ネットワーク／第一生命ホール

助成：平成20年度文化庁芸術創造活動重点支援事業
財団法人 ロームミュージック ファンデーション
(財) 三菱UFJ信託芸術文化財団

文化庁
AGENCY FOR CULTURAL AFFAIRS

■ 日本音楽集団：http://www.promusica.or.jp/　E-mail：office@promusica.or.jp
■ NPOトリトンアーツ・ネットワーク：http://www.triton-arts.net

和と声との出会い、作品との出会い

秋岸寛久

ようこそのお運びで、厚く御礼申し上げます。

本日は「和と声—邦楽器と合唱の交響」と題しまして、すべて声を伴った作品をお届けいたします。また、指揮者の河地良智さんはじめ多彩な客演をお招きし、大変豪華なステージとなっております。最後までゆっくりとお楽しみください。

まず始めは「くるだんど」。1963年、音楽集団創立の前年の作品で、この曲の成功が音楽集団結成のきっかけとなったそうです。タイトルと同じくらい、いえ、それ以上に印象的なこの曲を私が初めて聴いたのは、音楽集団に入った直後だったと思います。邦楽器を聴くつもりだったのに、完全に合唱に耳を奪われてしまいまして、それはもう大変な衝撃でした。合唱経験のある三木稔先生の合唱に対する思いがストレートに伝わってくるような気がして、心に響きます。今よりずっと勉強熱心だった私は、奄美民謡の「くるだんど」をいくつか聴いてみたりもしました。奄美民謡全体の特徴だと思うのですが、旋律が大変難しく、それでいてどれも純粋、素朴で、どうしてこれがあの壮大なカンタータになるのだろうと、また、あらためて驚きました。しかし、なかなか生で聴く機会に恵まれませんでしたので、今日は大変楽しみです。

2曲目は「古代舞曲によるパラフレーズ」。1966年の作品です。この曲を初めて耳にしたのも同じ頃です。「こんなのあり？」という感じで、やはりものすごい衝撃でした。複雑なリズム、音使い、邦楽器でここまでできるの？と思って楽譜を見ると、案の定演奏不可能な音が並んでいます。なんてことがあるわけもなく、すべて計算しつくされていて指使いまで書いてあったりします。「邦楽器で作曲するにはここまで楽器のことを知らないといけないんだ」と、若かった私は闘志を燃やしたものです。そしてソプラノのヴォカリーズも大変魅力的で「そうそう、これが古代のうた！」と、なぜか納得してしまいます。古代の音楽を聴いたことがあるわけでもないのに。

そして「呑気布袋　コンサート組曲」。2年前の11月に初演された和楽劇版の合唱部分を中心に、コンサート用に再構成しました。芝居あり、アリアありの大変楽しいステージだったのですが、その中でも大きな役割を担ってくださったのが東芝フィルハーモニー合唱団のみなさんです。100人近い合唱団の力強いハーモニーからこのコンサート組曲のアイデアが生まれたといっても過言ではないでしょう。脚本の荘奈美さんに芝居部分を「語り」に作り直していただき、落語家・柳家三之助さんに語っていただきます。作曲は我々音楽集団団員の作曲家三人。気心の知れた仲間ですし、「呑気布袋」以前にも音楽劇「砂漠に消えた王」で共作の経験済みですので、違和感なく一つの組曲に仕上がっていると思います。ぜひ肩の力を抜いて、ゆっくりとお楽しみください。

○ くるだんど
～奄美の旋律による日本楽器と混声合唱のためのカンタータ～
三木 稔作曲（1963年）

［笛］竹井誠
［尺八］Ⅰ 加藤秀和　Ⅱ 渡辺淳　Ⅲ 原郷隆
［三絃］Ⅰ 杵家七三　Ⅱ 簑田弘大　Ⅲ 山崎千鶴子
［十七絃］宮越圭子　渡辺正子　彦坂恵美
［打楽器］仙堂新太郎　高橋明邦　若月宣宏
［合唱］東芝フィルハーモニー合唱団
［指揮］河地良智

○○ 古代舞曲によるパラフレーズ
三木 稔作曲（1966年）

［笛］西川浩平
［尺八］Ⅰ 米澤浩　Ⅱ 加藤秀和
［三絃］工藤哲子　杵家七三
［琵琶］首藤久美子
［箏］Ⅰ 熊沢栄利子　Ⅱ 桜井智永
［十七絃］久本桂子
［打楽器］尾崎太一　高橋明邦
［ヴォカリーズ］羽山弘子
［指揮］河地良智

……休憩

○○○ 呑気布袋 コンサート組曲 初演
〈出囃子〉(***) 〈前奏曲〉(***) 〈はかなしや〉(***) 〈難陀龍王〉(***)
〈間奏曲〉(**) 〈長き世の〉(**) 〈春駒〉(*) 〈さあさ聞かしゃんせ〉(**)
〈草の蓮葉な世にまじり〉(**) 〈決闘〉(*) 〈一粒の米〉(*) 〈ただ一人〉(***)

［作詞］ 荘奈美
［作曲］ 秋岸寛久(*)・川崎絵都夫(**)・福嶋頼秀(***)　※(*)・(**)・(***) 各作曲家を示す
［語り］ 柳家三之助

［笛］竹井誠
［笙、篳篥］西原祐二
［尺八］加藤秀和　原郷隆　米澤浩　渡辺淳
［三味線］杵家七三　工藤哲子　簑田弘大　山崎千鶴子
［琵琶］久保田晶子　首藤久美子　藤高理恵子
［箏］Ⅰ 熊沢栄利子　高橋はるな　渡辺正子　Ⅱ 桜井智永　彦坂恵美
［十七絃］久本佳子　佐藤里美
［打楽器］尾崎太一　仙堂新太郎　若月宣宏
［合唱］東芝フィルハーモニー合唱団
［指揮］田村拓男

「宝船ふたたび」

荘奈美

同じこの第一生命ホールの舞台上で、呑気布袋和尚が息をひきとったのは、二年前のことでした。長いような短いような月日を経て、和尚は、同じ場所に蘇生する次第とはなりました。しかし、今回は、和尚役の善竹十郎さんも、新発意役の森一夫さんも、花の精実はマリア観音役の上原まりさんも、舞台上にはありません。不出来な台本に整形のメスを入れ、うるわしき見目形に整えてくれた辣腕の演出家の姿もありません。あのときの熱っぽい空気を思い出しつつ若干の淋しさを感じないわけではないものの、別の期待が、いまわが胸の温暖化を促進しつつあるかのようです。三つの役どころを一手に引きうけ、狂言まわしをしてくださることになったのは、柳家小三治門下の若き落語家・三之助さん。前回が狂言版なら、今回は落語版、といったところでしょうか。

＜和＞の味は保たれています。＜楽＞は当然そのままです。＜和楽劇＞という性質には、何の変化も生じていません。それでいて、何かしら全く別なものが立ち現れてくるのではないか。そんな期待が、胸をあたためてくれるのです。

何といっても心強いのは、前回と同じ合唱団のかたがたが、どーんと舞台上に陣どっているということ。合唱団は、それ自体、重要な登場人物なのでした。それがなくては劇宇宙が存在しなくなるであろう影の主役としての合唱団。台本をつくるとき、ひそかに、合唱団の存在を、ギリシャ古典劇のコロスになぞらえていました。ご存知のようにコロスは登場人物たちの背後にあって、民の声を代弁しつつ主人公たちの行為に賛同し、批評を加え、時として突如神の声に変貌して主人公たちを断罪したりもするのです。愚かなようでありながら、実はきびしい審判者でもあるコロス。民主主義というものの根っ子なんですね。

目利きのかたがたには一目瞭然のことですが、合唱曲の詞のそこここに、いにしえの俗謡やら佛教歌謡やら浄瑠璃やらから借用した語句がちりばめられています。そこに不特定多数の民の声が表出されていると思えたからです。民の声には、私的所有権などないでしょうから、心置きなく盗用させてもらいました。

根が下賤であるらしく、貴顕淑女向けの高尚なる文芸は、どうも苦手です。当今大流行の「源氏物語」など触れるだけでアレルギー性発疹が出る始末です。その半面、中世の俗謡集や作者不明の軍記物語などを開くと、心がのびのびとなごんできます。神社佛閣にしても、そう。いかめしい構えの大社大寺の前に立つと身がすくむ思いですが、七福神やお地蔵さんのあるささやかな寺に行くと、時を忘れてうっとりします。そのあたりのところから、布袋さんのココロが落語のココロにうまく接続してくれるだろう、と勝手に思い込んでいるのですが。

ま、何はともあれ、舞台、客席ともどもに七福神の宝船に乗りこんでゆらゆらりとゆれている、そんな極上の浮遊感がうまれてくれば、これに過ぎたることはありません。

くるだんど
～奄美の旋律による 日本楽器と混声合唱のためのカンタータ～
三木 稔作曲（1963年）

奄美は美しい南の島だが、為政者と労働者の激しい相克の歴史が秘められている。奴隷たちは黒い雨雲の出現を見て「黒だんど」と叫び、嘆き、うさ晴らしをしたそのことばや旋律の断片を借りた、能動的な日本の音楽を目指す賛歌といえる。
全曲は「くるだんどと掛声（いとう）」「船歌」「八月踊り」の三部分よりなり、続けて演奏される。
この曲は日本音楽集団結成への熱い波が起きていった作品である。1963年南日本放送の委嘱によって作曲された。

河地良智（かわち よしのり）
桐朋学園大学指揮科に学び、斎藤秀雄、秋山和慶の両氏に師事。1973年、第3回民音指揮コンクール（現東京国際指揮コンクール）で奨励賞を受賞。二期会オペラやN響定期公演などで、W.サヴァリッシュ氏、O.スウィトナー氏等の副指揮者を務め、'75年、群響正指揮者に就任。'83年より文化庁海外派遣員としてドイツ・バイエルン国立歌劇場でW.サヴァリッシュ氏、ミラノ・スカラ座でG.パタネ氏について積極的に歌劇場での研鑽を積む。
最近では、日本ユンゲオーケストラを結成し、北京で日中合同オーケストラの指揮をする等、国際交流にも力を注いでいる。
また、東京トロイカ合唱団の常任指揮者として、ラフマニノフの名曲「晩祷」の連続演奏や、2004年1月、文化庁国際芸術交流事業でモスクワ・サンクトペテルブルグにおいて、同合唱団の公演を指揮する。
それらの貢献により、北京市日中交流センター、オーストリア・ブルゲンランド州、また諫早市より文化特別賞を受ける。
現在、洗足学園音楽大学教授、学部長及び同大学院音楽研究科長、東京藝術大学講師。

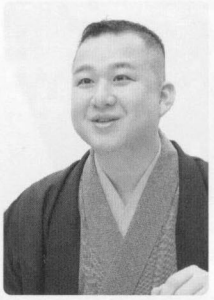
古代舞曲によるパラフレーズ
三木 稔作曲（1966年）

＜前奏曲＞は器楽的な構成美を持つ
＜相聞（そうもん）＞は万葉の恋の歌
＜田舞（たのまい）＞は大胆なリズムをもったスケルツォ
＜誄歌（るいか）＞は慟哭がそのまま音楽になった葬祭の歌
＜嬢歌（かがい）＞は人間の本能を旺歌する祭
その去来のさまが画かれる五楽章からなっている。
NHKの委嘱により1966年に作曲、音楽集団第4回定期演奏会で初演された。

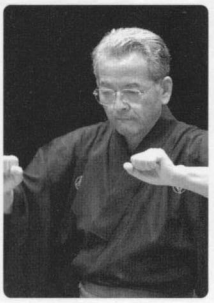
羽山弘子（はやま ひろこ）
桐朋学園短期大学卒業。東京音楽大学卒業。同研究科修了。'94イタリア政府給費留学生。ダッラーパコ国立音楽院卒業。第29回イタリア声楽コンコルソ金賞受賞。二期会や東京オペラプロデュース公演はじめ多くのオペラに出演。また宗教曲のソリストとしても活躍している。
東京オペラプロデュースメンバー。
二期会会員。

呑気布袋 コンサート組曲 初演
秋岸 寛・川崎 絵都夫・福嶋頼秀共作

セルバンテスのドン・キホーテを日本の物語に置き換え「呑気布袋」として、2006年、日本音楽集団第185回定期公演にて初演された。狂言、琵琶歌、テノールに加え、コロス役として東芝フィルハーモニー合唱団らの助演を得て、和楽劇として公演された。
作曲は音楽集団団員、秋岸寛久、川崎絵都夫、福嶋頼秀の共作である。その初演の公演の中の合唱曲をまとめて演奏会形式とし、コンサート組曲として再登場する。案内役は落語家の柳家三之助氏。＜出囃子＞＜前奏曲＞＜はかなしや＞＜難陀龍王＞＜間奏曲＞＜長き世の＞＜春駒＞＜さあさ聞かしゃんせ＞＜草の蓮葉な世にまじり＞＜決闘＞＜一粒の米＞＜ただ一人＞全12曲。



柳家三之助（やなぎや さんのすけ）
1995年、十代目柳家小三治に入門。
1999年、二ツ目昇進し柳家三之助と改名。
都内の寄席や各種落語会にて全国的に公演を行いながら、インターネットを通じた広報活動や著作にも力を入れる。
寄席囃子の笛吹きとしても、落語会や各種録音媒体にて演奏を行っている。



田村拓男（たむら たくお）
1964年、打楽器奏者として日本音楽集団の創立に参加後、指揮者として活躍。多数の国内外公演に参加。斉藤秀雄（指揮）、山田一雄（指揮）、石桁真礼生（作曲）、藤舎華鳳（長唄囃子）氏らに師事。
元東フィル在籍。現在、日本音楽集団代表、NPO邦楽指導者ネットワーク21代表理事など。

ソプラノ

井澤 須美子
石川 嘉子
入澤 奈央
岡村 真貴子
小野 治美
加藤 久美子
久住呂 圭子
黒崎 孝子
小林 聿子
近藤 洋子
佐藤 晶子
清水 教子
須沢 郁子
鈴木 幸子
平 博子
高橋 幸枝

ソプラノ

竹村 由美子
千代田 三千恵
出水 美代子
豊島 美也子
原 美香
平林 圭子
古川 悳子
松岡 規子
松澤 弘美
松田 清美
間仁田 春江
南 久美子
安森 薫
八橋 利恵
柳 聖子
湯浅 美子

アルト

青木 夕子
小倉 香子
角田 明江
小林 真理子
杉森 暢子
玉木 章子
綱島 洋美
富岡 久美子
中山 文子
中山 八重子
浜尾 静代
日向 公美
平田 美恵子
藤原 明美
村岡 武子
山口 英子
山中 京子

テノール

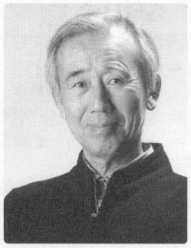
糸山 勝
上野 隆
小口 浩
大鳥 知久
大橋 新一郎
金内 真二
川村 和男
結束 博史
高坂 潔
高橋 勝
竹村 稔
丸山 晃司
安森 亮一

ベース

井澤 浩一
遠藤 拓夫
大竹 正一
太田 茂
大田 昇
亀田 多彦
小林 乾泰
小林 正通
西方路 明
清水 勝正
清水 雅己
田代 光彦
富岡 正次
廣岡 正宏
松岡 聰
御園生 勲
南 昭彦
森 俊昭
山田 雄也

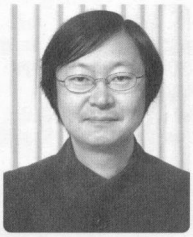
東芝フィルハーモニー合唱団 東芝グループ社員OBOG、その家族等で構成する企業内の混声合唱団で、92年5月発足。河地良智 常任指揮者の指導のもと、団員数約100名で活動中。定期演奏会では、オペラ、ミュージカル、ミサ曲、レクイエム、ポピュラーソング等、幅広いジャンルの合唱曲を演奏している。最近では、ヴェルディ「オペラ名曲集」、プッチーニ「グロリア・ミサ」、Cオルフ「カルミナ・ブラーナ」、増田順平「コーラスの旅路」などを演奏。
来年の定演は5月31日(日)ミューザ川崎シンフォニーホールにて開催。
日本音楽集団とのステージは和楽劇「呑気布袋」で初めて実現し、今回は2度目の客演。

作曲家プロフィール



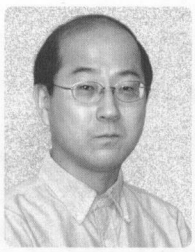
三木 稔(みき みのる)

《春琴抄》から《源氏物語》《愛怨》まで「三木稔、日本史オペラ8連作」が05年に完結。日本音楽集団(1964)以来、三木オペラ舎(旧歌座)・結アンサンブル・オーケストラアジア・オーラJ・アジア アンサンブル・北杜国際音楽祭を創立し、例のない創造・プロデュース活動を国際的に展開。《急の曲 Symphony for Two Worlds》などの管弦楽曲、欧米で1万回も演奏の《Marimba Spiritual》など室内楽・打楽器作品の多くは国際的なレパートリーとなっている。芸術祭大賞・紫綬褒章等受賞。 各種楽譜・CD「三木稔選集I～VII」・著書「日本楽器法」など出版多数。
詳細は http://www.m-miki.com 参照。



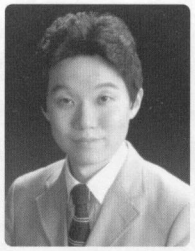
秋岸 寛久(あきぎし ひろひさ)

横浜生まれ。東京音楽大学作曲科卒。助川敏弥、浦田健次郎、三木稔の各氏に師事。同大学研究科を修了後、日本音楽集団に入団。邦楽器のための作品も数多い。日本フィル九州公演、横浜国大グリークラブ、NHK邦楽技能者育成会、オーストリア、シュライニング音楽祭、オーケストラ・アジア等からの委嘱や、市川猿之助スーパー歌舞伎「オオクニヌシ」の音楽、NHK伝統和楽団の編曲等を手がける。



川崎 絵都夫(かわさき えつお)

作曲家。1959年東京生まれ。魚座。A型。
東京芸術大学音楽学部作曲科卒業後、オーケストレーターとして活躍。並行して邦楽器、合唱、室内楽などの委嘱作品発表を続けている。文学座・新国立劇場を始めとした舞台音楽も多数。
邦楽合奏作品は親しみ易い作風で広く演奏されている。日本作曲家協議会会員。
主な邦楽作品「花織」「蒼き狼の夢」「梁塵今様」「箏・ふたつ」「尺八三重奏曲」



福嶋 頼秀(ふくしま よりひで)

1967年生まれ、慶應義塾大学卒。
東京フィル、東京都響、仙台フィル、京都市響といった国内主要オーケストラからの編曲依頼等が多数。日本を代表する指揮者・ソリスト・ポップス系アーティストらが演奏している。
2003年にはチョン・ミョンフン監修指揮のコンサートの構成編曲を担当し、DVD化される。またファミリーコンサート等の構成司会も多数。土曜ワイド劇場、月曜ドラマスペシャル、ミュージカルや舞台などの劇伴音楽も多数手掛ける。
さまざまな邦楽器のための作曲作品も多い。

2008年「ブラジル公演」報告レポート

この度、日本音楽集団は8月27日（水）～9月3日（水）にかけまして、「日伯交流年：ブラジル移住100周年記念事業　第28次日本音楽集団海外公演」を行いました。

このブラジル公演は、公演プロデュースをした越智と、越智の知人でサンパウロを中心に和太鼓で活動中の「Taikoart Produção Cultural Ltda」代表の木下節生氏と共に、二年9ヶ月前から計画・準備をし、今年3月24日に文化庁からの助成通知を受け、公演開催が決定しました。

現地時間の8月30日（土）・8月31日（日）の両日にSESCビラマリマナで行われました演奏会は、650席に対して、30日が496人、31日が557人、と多くのお客様に集まって頂き盛況な演奏会になりました。

聴衆の中には、箏奏者で今回のツアーメンバー田村法子のお母様から日本で箏曲の手ほどきを受けた日系人が、現在もブラジルで箏曲を続けておられ、多数の箏曲関係者を会場にお連れ下さるという事もございました。

満席に近いお客様を迎える事が出来、心温まる多くの拍手を頂ける演奏会になりましたことは大変幸せなことであり、集客に向けての地道な活動をして頂いた現地地元の木下節生氏を中心とする日系関係者に感謝しております。

公演後には見にこられた方々の中からは「今年一番の演奏だった」「日本人（日系人）として誇りをもちながら演奏を聴かせていただきました」と言う感想や、非日系人のお子さんで「演奏を観てすごく日本に興味を持ち、日本についての勉強を始めたいと思います」という、とても嬉しい感想を耳にする中で二日間の公演を終えました。

翌日の9月1日（月）の22時55分（現地時間）にはブラジルを発ち、9月3日(水)日本に帰国しました。日本とブラジルでは12時間もの時差がありましたので時差ぼけと、飛行機での移動が長時間になった事による疲れもありましたが、参加者全員が大きな怪我等せずに無事に帰国出来ました事は何よりだったと思います。

帰国後、一ヶ月が経ちましたが、夢のように過ぎ去った一週間のブラジル公演ツアーが、昨日の出来事の様に思われます。

なかでも、故郷を懐かしむかのような日系人の温かさに触れる事が出来ましたことは忘れられません。町を歩いていると、多くの日系人からも話しかけられましたが、その言葉の一つ一つがとても綺麗で丁寧な日本語であり、懐かしい、よき時代の日本が、今も地球の裏側のブラジルに存在しているように感じました。

実りのある公演と共に、人と人との触れ合いの大切さを勉強させて頂く機会になり、日本音楽集団の歴史に大きな軌跡を残す事が出来た旅になったと思います。

最後になりますが、この公演に対しまして「文化庁」「日商岩井国際交流財団」両基金より御助力を賜りました事に厚く感謝を申し上げます。

ありがとうございました。

越智成人

● 賛助会員へのお誘い ●

1999年10月、特定非営利活動法人日本音楽集団が発足したのを契機に、賛助会員を募集しています。
多くの方々からの支援を仰ぎ、息の長い活動の定着と発展を目指したく、ご協力をお願い申し上げます。

年間　個人会員10,000円（一口以上）　法人会員30,000円（一口以上）

【賛助会員】五十音順

法人
㈱全音楽譜出版社
㈱宮本卯之助商店
NPOトリトン・アーツ・ネットワーク

個人
青柳　堯　太田颯衣　四反田素幸　渡辺邦子
安達眞五　大塚悦子　棚野正士　渡辺治子
新井克輔　川壁　正　土井恵見
江西　縁　岸　彰則　水野正徳
大関富枝　後藤陽子　宮川慶子

特定非営利活動法人
日本音楽集団
〒151-0073　東京都渋谷区笹塚3-17-1 滝沢ビル302　TEL03-3378-4741 FAX03-3376-2033
ホームページ http://www.promusica.or.jp/　E-Mail office@promusica.or.jp

INTERNATIONAL MUSIC SERVICE
ims

アイ・エム・エス

●楽器リース●保管●移動●ステージ・スタッフ派遣
〒167-0043東京都杉並区上荻2-3-4 ゆうでんビル
PHONE.03-3397-2292
FAX.　03-3397-7728
URL : http://www.ims-tokyo.co.jp
E-mail : ims-mail@ims-tokyo.co.jp

粋に愉しむ

株式会社 琴光堂

〒152-0003 東京都目黒区碑文谷2-19-15
TEL 03(3792)8481 FAX 03(3792) 8437
URL : http://kinko-do.com/
E-mail : tokyo@kinko-do.com